

をそれに溶合せ、両方の長所をとりあげて 行くべきであると申し上げておきます。

三、教育学の立場から

大阪学芸大学

小川正通

(一)、はじめに

日本人は潔癖のせいか、何事に対しても、割り切らないと承知しない傾きがある。幼稚園の先生方も同様であって、私どももときどき次のように聞かれる。例えば朝の集りをやった方がよいのかやらない方がよいのか。また単元保育でなければいけないのかどうか等々。その際、保育の実際上の経路を通してはどうですかと聞き直したり、中間的な返答をすると、どうも先生方はよい顔をしてくれない。自由保育と一斉保育というこの出題もどちらかに割り切れと強迫している感じがする。

(二)、概念規定

自由保育の自由という言葉は美しいが、歴

史的にも変遷があり多義である。しかしここでは一斉保育の概念との関係から、ほぼ推察できる。教師が主体で、客体としての幼児全体を一律に同じことを教え或は一定の型にほめこもうとする指導様式を一斉保育が指すとするれば、その反対に幼児一人一人の自由な活動を教師が指導する方式を自由保育といつてよい。一体、保育の目的と方法は相即の関係にあるが、ここでは方法論が問われているのであり、さらに指導の方法(形態)が問題とされているのであると思う。

(三)、指導形態の発達

(1)、前近代的指導様式——非学校的、家庭教師的で、一人の教師が子供を一人一人別個に指導する。子供が多数でも一人一人交互に

寺子屋式に指導する。個別指導であって、子供の個性、進展は教師にわかるはずだが非能率的様式の能率をあげるためにも、屢々子供の興味、要求に無関心、教師中心教材中心に流れる。たとえ子供が多くても、子供相互の横の連絡は殆んどない個別的なものである。

(2)、近代学校的指導様式——教師一人が多数の子供を一斉に同じことを指導する(極端な一斉保育)。正面に黒板あり、教壇上に教卓を前に教師がむちを持ち、生徒が椅子に正坐して教えを受ける一時代前の学校教育を思い出されたい。幼稚園にもかつてそれと似た風景が見られぬでもなかった。教師中心、教材中心であり、従って教科単元的な主知主義伝統的な一定の型にはめこむ訓練主義を採った。子供の興味・個性は無視されがちで、子供は所謂プラスチックに陥り易い。(1)よりはるかに能率的であるが、それは生徒の進度や発達段階を無視して、その同一性を予想しようと考えるからである。しかし実際問題としては、同一性を必ずしも予想できないので、中間の生徒を基準として教えていくことになる。一斉に歌ったり、作ったり一斉に身体活動をしたりするので、子供相互の横の

つなぐりは多少ある。その意味で(2)は(1)に対しより社会化された様式といえる。

(3)、所謂自由保育。自由指導様式——学校組の解体、子供の自由といふかなり極端なものも多い。子供は各自好きなことをやる。即ち子供の要求、興味が中心であるから、子供の自発活動は期待されるし、子供にとつて楽しい経験の連続であろう。個性の芽も伸びる。教師は間接的に助成するだけ、しかしこの様式によると、消極的な幼児は、循環的な遊びに終始し、発展性に乏しい。設備や施設が整備していること教師の能力がすぐれていることを必要とするであろう。また子供の発達段階や進度が非常にちがっていたり、幼児数が多いとこまる。子供相互は他の子供の遊びや仕事を模倣する程度で、横のつながりは乏しい。この様式は(2)に対し個別化的様式といえる。「保育要領」は、この様式をかなり高く評価している。「保育要領」12、14、41、54頁参照)

(4)、分団指導様式——分団保育、(2)と(3)の総合的な程度の高いもの。発達のには(2)の次にすでにあらわれている。(4)はさらに三つ或は四つに分けて考えられる。(a)分団の一つ

を一斉に指導し、他は自由活動にまかせ——(2)と(3)の単なる組合せ、(b)各分団のすきな活動にまかせ——分団間の連絡は殆んどない。(c)各分団が活動を分担し、一連の目的に自然に或は意図的に総合される場合——共同作業・共同学習、(d)能力別分団

(4)の(c)が最高級、従つて一年保育児でない無理と考えられる。しかしここでは幼児の要求と社会の要求がともに十分充されることのできる。自主性、自律性、協力性も自然に養われる。要するに(4)は子供相互の連絡もあり、個別化と社会化の統合形式と見られる。

以上、指導の形態を発達史的にしかも類型的にとらえたので、純粹、極端にすぎるおそれがあり、保育の実際としては、それほど純粹な形でないと思う。

(四)、園児の生活指導(広義)の理論

(1)遊び即生活としての幼児の遊びも分裂させ、学習仕事、生活習慣等へと次第に誘導発展させねばならない。

(2)、幼児の興味や要求を出発とする楽しい経験活動をなさしめるに當つて、それを助成する教師の側から社会的要求が加えられね

ばならない。

(3)、幼児の個性とは固定的なものでなく、発展的な個性の芽である。個性的指導と調和的人間への育成との間に矛盾がないように指導しなくてはならない。

(4)、各人好きなことを思う存分やらせること(個性即応の教育)とともに集団生活の体験を十分に与えることも必要である。集団の力の偉大さを理解せねばならない。

(5)、ガイダンスは、単なる個人の指導ではなく、社会的個人の指導である。

(五)、結 論

できるだけ自由なふんいきのもとで、幼児の自主的自律的・創造的・協力的活動が期待されるのであるから、正しい意味の自由保育的なものが基盤とは考へるが、また正しい意味の一斉保育的なものも、以上の理由によつて必要といわなければならない。従つて自由保育と一斉保育とは全き意味の対立概念ではなく、相互に長短補足し合うべきものであるともいえる。保育の実際としては、如何にそれら適当に組み合わすかであろう。明確に割り切りえず申訳ない。